

鎌倉古道

なごやの

をさがす

池田 誠一

【8】

鳴海潟を渡る(上)…広い河原を行く

1 潟を渡る3つのルート

天白川は、精進川より後の時代まで海が入り込んでいたようです。そこは鳴海浦とか鳴海潟という名前で呼ばれ、古くは街道の難所とされたところでした。

ここは多くの紀行文に登場します。有名なのは、中世より前、菅原孝標の娘が書いた『更級日記』です。その旅日記の中では、「尾張の国、鳴海の浦を過ぐるに、夕汐ただ満ちに満ちて、

今宵宿らむも、中間に汐満ち来なば、ここをも過ぎじと、あるかぎり走りまどひ過ぎぬ」と、苦勞して渡ったことが記されています。

鳴海は中世には有名な歌枕になっており、残されただけでも百数十首にのぼると言われます。その中で、街道の情景を歌っているものとして、次のような歌があります。

「なるみ潟 潮干に浦やなりぬらん
上野の道を行く人もなし」 藤原景綱
「なるみ潟 汐満ち時になりぬれば
野並の里に人伝うなり」 藤原景綱
「なるみ潟 汐の満ち干のたびごとに
道ふみかうる浦の旅人」 宗良親王
これらが詠われた時代は鎌倉の中頃から南北朝の時代になりますが、潮の状況によって道を選びつつ渡っていたことが分かります。

この鳴海潟を渡る道は、上・中・下の3つのルートに分けて考えることができそうです(図1)。天白川の前身の鳴海潟を、街道がどう通っていたか、今回(上)と次回(中・下)に分けて考えてみます。

2 上野の道

(1) 鳴海潟の海面

鳴海潟に当時どのくらい海が入っていたかというのは難問です。海面の侵入の要因としては、①海面の上下、②底面の変化、③潮の干満、④堤の有無などが考えられます。①の海

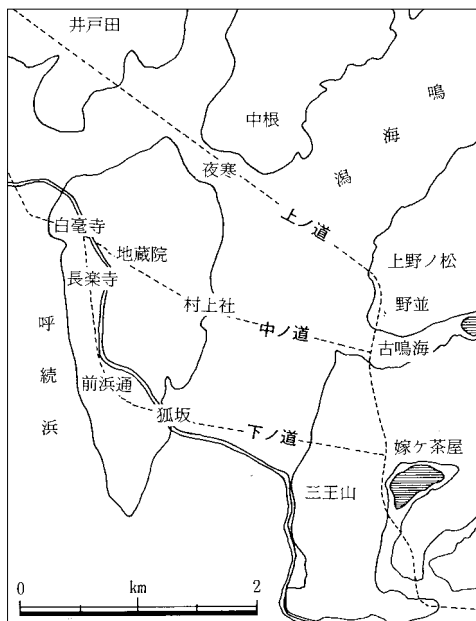


図1 鳴海潟を渡る3つのルート(文献①)

面は、縄文時代には何れも上下した時もありましたが、中世では平安から鎌倉時代にかけて少し上がった程度とされています。②の洪水等による土砂の堆積も考えられますが、何れもの変化をしたとは思えません。また、③の潮の干満は、湾の奥だけに難しいところがありますが、今の名古屋港では年間最大の日で+1.5メートル位になっています。④の堤は中世にはほとんど無かったでしょう。

明治時代の地図で調べると、旧東海道の辺りが標高2.5メートルです。またその2キロ上流、中根と野並を結ぶ線の少し上に標高5メートルの線があります。精進川の例やこれまでの説明から考えると、中世では標高5メートルの位置ならほぼ陸地化していました。そして2.5メートル位ではその末期でも、潮のために渡る事ができない時があった…という状況ではなかったでしょう。鳴海潟を渡る3本の道は、上ノ道が標高5メートル弱、下ノ道が2.5メートル位になるのです。

(2) 上野の道

この辺りの鎌倉街道は、上野街道とか上野の道と呼ばれることがあります。前に紹介した和歌にも出てきました。この上野は、野並の字に「上野」という地名があるためではないかといわれます。しかしこの呼び方は上ノ道のルートを目指すことが多いため、単に上流という意味で「うえ」や「かみ」の道と理解されていたのかもしれませんが。

(3) 野並の里の松

目的地となる野並には街道の名残とされる聖松、並松という2つの松がありました。

聖松は街道の目印になったという、野並の山の上にあった2本の松です。(図2) 広い河



図2 野並の山の上の聖松。
一本は江戸時代に枯れた(尾張名所図会)

原に行く時の目印でしょうか。大きな松の1本が昭和10年頃まで残っていて、都心のデパートの上からもよく見えたといえます。

一方、並松は野並の里にあった一本松です。土壇があり、街道の松並木の原型ではないかといわれます。これも昭和19年ごろ枯れて、その跡も区画整理で消えてしまいました。

(4) 「上ノ道」のルート

江戸時代の文献から、井戸田から野並方面への経過点をみると、山崎村の条に『尾張徇行記』に、「新屋敷ツツカケ場へカカリ」と「中根村へコエ夜寒里ニカカリ」とがでています(文献③)。このルートの中には、西側の笠寺台地と東側の八事丘陵の間の谷間があり、前者はその笠寺台地側、後者は八事丘陵側を指していると考えられます。

この谷間は2~300メートルほどの幅ですが、以上からルートとしてはその間を挟んで、西の新屋敷付近を通るものと、東の中根付近を通るものが考えられることになります。台地の高さは10メートル位ですが、特別の理由がなければ、道は台地の裾を通過して河原に出、野並を目指したのではないのでしょうか(図3)。ただ古い時代には、さらに上流の島田近くまで迂回したこともあったといえます。



図3 鳴海潟の跡と上ノ道の想定範囲

3 鎌倉街道をさがす

それでは井戸田から野並のルートを追って現地を歩いてみます。井戸田からは東に向かう中根ルートと東南に向かう新屋敷ルートが考えられますが、まず後者の道から始めます。

地下鉄の妙音通駅の2番出口を出てまっすぐ進みます。2つ目の信号を右に曲ると山崎川で、橋の名は師長橋と故事を伝えています。橋を渡り、川に沿って東に進みます。右に青峰観音をまつる社の所で南側の道に抜け、左に行きすぐ右に曲ります。突き当たって東に曲り、幹線道路の信号を渡ります。

そのまま東に進むと小さな水路橋に出ます。

山崎川。師長橋付近から進行方向をみる



この辺りから先の右手が八事丘陵と笠寺台地の間の谷間です。橋は塩付橋と名付けられ、塩付街道が通っていました。この少し向こうに、江戸時代一時天白川を山崎川に切り替えていた川の跡があり、今の落合橋の所で合流していました。この無謀とも思える切り替えは10余年で元に戻されています。

橋を渡らず右に曲ります。次の角の先は通れないので迂回して水路に沿って東南に進みます。200mほど行くと右に階段の道があります。ここからは少し山裾の道を外れ、笠寺台地の史跡を訪ねてみましょう。

階段の道を上ってまっすぐ進みます。広い通りを越えて3本目を右に曲ると右に医王寺です。寺は16世紀の創建ですが、その前は城で新屋敷西城跡とされます。寺の正面の道を南に2本行き左に曲って少し行くと左に成道寺があります。ここは室町時代の鳥栖城の跡とされる所です。中に入ると左手に城主夫妻



台地の谷間の水路。橋は塩付橋

の像とされる二つの石像が奉られています。刻まれた銘は1515年で、銘のある石仏では市内最古とされる市文化財です。

門の前の道を東に進むと八剣社があります。



成道寺の石仏。銘が1515年となっている

ここは鳥栖八幡古墳で、直径45m、高さ5mあり、その上に社があります。東側には木々の間から目的地の野並方向が見渡せます。反対側に下り右に、1本目を北に曲ります。

広い道に出て右に信号を渡り、1本目を左に入ります。道はすぐ東北に向きを変えます。この辺りを笠寺台地の山裾の道が通っていたのでしょ。地名は今までは平子ですが、古い字は「夜寒」だったといい、街道の通過点とされる所です。道の突き当たりが坂になっています。その下までの間が台地間の谷間です。上り坂になる手前が河川を切り替えた跡で、一部が緑道になっています。この辺りが中根ルートの山裾の道になります。

200m程、坂を上りきったところで右に曲ります。少し行くと下りになり、寺が見えて



古墳の上の八剣社



天白川から山崎川に流した水路跡(一部)

宝蔵寺。中根銅鐸発見の標識が立っている



きます。寺の手前に公民館があり、その入口に「中根銅鐸発見地」の標識が立っています。有名な重文の中根銅鐸は明治の初め、この少し西で掘り出されました。今は兵庫県西宮市の資料館にあります。その向こうが宝蔵寺です。寺は西八幡神社と一体になっていて、南側に展望が開けています。南に神社の正面を降り下の道を左に行くと、点滅信号の右向こうに観音寺があります。ここから東北にかけては戦国時代に中根城があったところとされます。中根城は、北、中、南と3つに分れていましたが、ここ南城が本城でした。南は天白川を外堀にする城で、織田信秀の子、信長の弟になる信照の築城とされます。ここも街道を押さえる地点だったのでしょうか。

寺の西の道を下り2本目を右に行きます。この道は下を中井用水が流れ、緑道になっています。次の信号の向こうが台地の角になり、八事丘陵の裾の道はその付近から河原に降り立っていたと考えられます。ここから野並の手前まで、1*。余りは広い河原でした。南に行くと堤防で右に平子橋へ上ります。

ゆったりうねる天白川の川筋は、昔は相当

平子橋から天白川の上流をみる。堤防を消すと昔の姿がイメージできる



蛇行していたようで、今の形になったのは江戸時代に築堤されてからといえます。工事中の橋から野並の背後の緑が見えます。川を渡り、昔は聖松目指して進んだのでしょうか。その道筋に近づくため、坂を下ったところで右に曲り、野並公園の手前を左に曲ります。昔の河原には今はびっしり家が並んでいますが、水平な地形が河原の昔を物語っています。

通りを越えてまっすぐ進むと少し上りになって水路にぶつかります。この水路は形状が整形されていますが天白川の古川とされ、今では郷下川と呼ばれます。右に行って橋を渡り東に進むと幹線道路です。この付近から右手に野並の集落がありました。幹線道路に沿ってやや下れば地下鉄の野並駅です。

4 目印だった聖松の跡

このルートを歩いてみると、当時の広い河原を歩くには、目標になるものが必要に思えてきます。東に向かう時その役割を担ったのが山上にあった聖松のようです。少し寄り道をしてその聖松の跡を探してみましょう。

先ほどの幹線道路を駅の方に右折せず、まっすぐ東に坂道を登ります。しばらく上ると梅野公園です。聖松は梅林の上にあったと尾張名所図会は描いています。(図2)公園の上は墓地になっています。高台を求めて右に行くと、高段に熱田神宮大宮司だった千秋家の墓地がありました。中に入ると20本ほどの墓標が規則正しく並んでいます。昔は墓標も許されずに松を植えた…ということ思い出し、ハッとしました。「聖」松だ…と思えば周りを見回すと、墓地の横の土壇から放射状に松の根がいくつも飛び出しています。

ここに聖松があった!?

…と。しかしそれは早とちりだったようです。大きな松はあったかもしれませんが、千秋家が野並の領主になったのは戦国時代の末のことでした。中世の街道の目印だった聖松では在り得ません。400年以上昔の街道さがしの難しさ。かみしめながら野並駅に下ることになりました。



千秋家の墓地。土壇から松の根が出ています

〈主な参考文献〉

- ①三浦俊一郎『南区の歴史』(1986、愛知県郷土資料刊行会)
- ②長谷川国一『郷土の文学探訪』(1966、自費)
- ③加納誠 企画編集『南区の歴史ロマンをたずねて』(2005、自費)